

<原著>

オルテガのスペイン史論—封建制度の欠如と分立主義の蔓延—

長谷川高生

A History of Spain designed by José Ortega y Gasset
- Absence of Feudalism and Spread of Particularism -

Kosei HASEGAWA

In this paper, I try to investigate Ortega's view of spanish history carefully. He designs a history of Spain from his point of view on the elite-mass relations. In her medieval age, Ortega asserts, spanish feudalism was very poor compared with ones in France and England, and so Spain couldn't have eminent persons after that. Her modern era was extremely confused and weakened by particularisms among various domestic groups and organizations, or local regions and districts. Spain has also famous particularisms in two autonomous regions of Basque and Catalonia. These particularisms are linked to historical behavioral patterns of "direct behavior" and *Pronunciamiento*. Thus, Spain has been dominated by country folks in contrast with the bourgeoisie and city-dwellers in France or England.

Key words : absence of feudalism, inexistence of eminent persons, spread of particularism, refusal to coexist, mass domination

封建制度の欠如、すぐれた人物の欠乏、分立主義の蔓延、共存の拒否、大衆の支配

I はじめに

スペインの哲学者オルテガは『大衆の反逆』を1930年に公刊したが、それ以前に母国スペインの歴史において「大衆の反逆」現象を見出し分析した『無脊椎のスペイン』を1921年に著わしている。本論文では、主にこの後者の著作を参考にして彼のスペイン史論を検討してみよう¹⁾。

II 封建制度の欠如—すぐれた人物の欠乏—

オルテガは上記の著作『無脊椎のスペイン』でその歴史の周期全体をわれわれに見せてくれる古代ローマ史のなかに、統合 (incorporación o integración) と分裂 (disintegración) の動向を観察した。スペイン史においてもオルテガは、統合と分裂の視点から考察している。まずオルテガは、「国家あるいは時代の性格を明らかにする際に、まず最初になさねばならぬことは、その国家あるいは時代における、大衆と選ばれた少数者の関係の方程式を立てること」²⁾

であると言う。彼は「支配と服従の機能は、あらゆる社会において決定的な役をはたしている。社会において誰が支配し誰が服従しているかの問題が不明確である場合は、その他すべてのことが判然としないぶざまな動きを見せる」と言明しているのである³⁾。彼はスペインの歴史における少数者と大衆の関係を分析することによって、スペイン史上においてすぐれた人物が僅少であったこと、そしてその原因として封建制度 (feudalismo) が欠如していたことを指摘し、またスペイン社会や生活における分立主義 (particularismo) の蔓延によって社会的共生が排除・拒否されてきたことを非難するのである。こうした観点からオルテガは、スペイン史上における古代から現代までの諸現象・諸事件を分析・説明する。そして、これらの諸現象・諸事件を時系列順に適切に列挙すれば、スペイン史のみごとな一大パノラマが展開されるのである。以下、オルテガの言説にしたがって、スペイン史における少数者と大衆のあり方を考察してみよう。

(1) スペイン—民衆中心の民族—

まずオルテガはこの少数者と大衆のあり方の例証として、「驚くほど豊富な模範的人物の輩出に特徴づけられながらも、彼らに続く大衆が少なく、ふじゅうぶんで、しかも不従順だった」ギリシアに対して、「ヨーロッパの対角線の両端に位置する」ロシアとスペインは、「その他のさまざまな性質はたいへん異なっている」が、『民衆中心』の二民族」であり、「すぐれた人物を長い間にわたって明らかに欠いていた」ことを挙げている⁴⁾。とくにスペインに関しては、「民衆の力と選ばれた少数者の力との間のほとんど絶え間のない不均衡という、最も特徴的であると同時に最も明白で身近な相貌が、わが国の長い歴

史の中でほとんど変化しなかった」と指摘している。つまり、「世に処するにあたり、個性的で自覚的な行動をとる主体的人格は、わが国では今まできわめて稀」であり、スペインでは『民衆』がすべてをやってきたし、『民衆』のできなかったことはなされずじまいに終わった」と言うのである。ところでオルテガにとって「民衆」とは、「生の基本的機能を果たすことができるだけ」であり、「学問や高度の芸術はこれを行なうことはできないし、複雑な技術を伴う文明を創造したり、長い間安定を保つ国家を組織したり、魔術的感動を高度の宗教に昇華させることもできない」存在なのである。それゆえ「スペイン芸術は民衆的、作者不詳の形—歌謡、舞踊、陶磁器—ではすばらしいが、博識を要したりする個性的な形ではたいへん貧弱」なのである。すなわち、「大衆の手になる作品と個人的努力が生み出した作品を区別する印の一つは、『行為者不詳』ということである。民衆的なものは無名的でありうる」のである。さらにオルテガは大国イギリス・フランスとスペインを比べて、前者の「二国の歴史の舞台上に登場した人物の盛んな繁殖ぶりと対照をなす、われわれの過去の無名的性格」を指弾し、「フランスあるいはイギリスの歴史は主に少数者によって作られた歴史であるが、ここスペインでは大衆が直接、もしくは政治的な社会的権力の中に自己の力を有効に集中することによって、すべてのことを行なってきた」と言う。たとえば「われわれが千年の歴史をもつ村々に入っていくと、教会とか公共建築物」が目に入るが、「個人的創作はほぼ完全に欠けている」のである。「スペインの私的建築物の貧弱さ」は「個性的スタイルを創り出せる力強い芸術的感覚をそなえた者」や「自己の人格の中に社会の膨大なエネルギーを集約し、それをもって物質的、精神的両面の偉業

をなしうるような強靱な気質」の不存在を示しているというのである。オルテガはスペインにおいては、「つねに有能な少数者が異常なまでに欠けていた」し、「この現象がスペインの全歴史を、あのはかない全盛の数瞬間をも説明してくれる」と主張するのである。以上の観点からオルテガは、彼が「スペイン史の本質的輪郭をなしていると考えているもの」を、「法外な異説」として、つまり「普通一般の説とまっこうから対立するため、裏返しになったスペイン史」として、以下のよう展開する⁵⁾。

(2) ヨーロッパ諸国家の歴史的構造

—フランク族と西ゴート族—

まずオルテガはフランス・イギリス・イタリアと比較しつつ、スペイン史における「封建制度」の欠如を指摘する。彼の見るところ、「これは美德であるどころか、われわれの最初の大きな不幸であり、その他すべての不幸の原因」なのである。オルテガによれば、スペインという「一つの社会機構」は「ローマ帝国が崩壊したときヨーロッパ中央および西部に生まれたある特定の種に、つまり、一つのタイプの社会もしくは『国家』に属している歴史的動物」なのである。このことは、「スペインがフランスやイギリスやイタリアと同じ一つの特別な構造を持っている」ことを意味し、「この四つの国は三つの要素が結合して形成されているが、そのうち二つはすべてに共通であり、一つだけがおのおのに異なっている」。その3つの要素とは①「比較的土着の種族であること」、②「ローマ文明の残滓であること」、③「ゲルマン人の移住」である。このうち、①はそれぞれの国の基盤を形成し、②は「ヨーロッパ諸国の発達の中ですべてに平均して見られる要素」である。③については、これが決定的な要素なのだが、

「東洋の国家組織のもつ歴史的構造や病理」とはたいへん異なり、「ヨーロッパ諸国は動物学上の別の種に属しており、それ独自の生理を持っている」。すなわち、「ヨーロッパの国家は、ある民族による他民族の征服—ローマ帝国であったような、軍隊による他民族の征服ではない—から生まれた社会」である。つまり、「征服者ゲルマン人は、被征服者の土着民と同一平面で水平的に融合せず、垂直の方向で融合した」のである。ゲルマン人は「ローマの学統」を受け取る一方で、「征服した大衆にその社会の様式を押しつけ」たのである。彼らは「形成や組織化の力」、すなわち「『形相』であり」、一方「土着民は『質料』である」。「彼らは決定的な構成要素」であり、「『決定を下す』者」である。オルテガの見るところ、「ヨーロッパの国家構造の垂直的性格」は、「国家が形成されている間、これを二つの階あるいは層に分けておく」のであり、これが「ヨーロッパ諸国家の歴史的生理独特の相貌」を生み出すのである。

さて、以上の①②③の「三要素が混ざり合っ

て国家組織を形成するまでに経て来た有為転変は、四つの国でたいへん異なっている」。スペインの場合、オルテガの洞察によれば、「アラビア人はわが国民性の形成の中で本質的構成要素でないし、彼らの統治は、イベリア半島の封建制度の弱さを説明するものではない」。③のゲルマン人の移動・支配こそが「決定的な国家形成要素」であり、「国家間の相違が生ずる際にもまた決定的な役」を果たすのである。たとえば、「フランスとスペインの違いはガリア人とイベリア人の違いよりも、この両地域に侵入したゲルマン諸族の異なる性質」、すなわち「フランク族と西ゴート族の相違」なのである⁶⁾。オルテガは「歴史的生命力の大小を示す尺度」からすれば、「フランク族はより高い位置を、西ゴート族

ははるかに低い位置を占める」と言う。「フランク族がガリアに、西ゴート族がスペインに入ったとき、彼らはすでに二つの異なった水準の生命力を表わしていた」のである。つまり、「フランク族は完全な姿で洗練された土地、ガリアに侵入し、そこに押えがたい生命力の奔流」を注いだのに対して、「西ゴート族はゲルマニアで最古の民族」であり、「最も墮落した時代のローマ帝国と共存していた」、「それゆえ、最も『文明化された』、換言すれば最も改革され変革され、硬直した民族」、「ローマ文化や文明というアルコール中毒にかかったゲルマン人」であり、「ヨーロッパの僻地であるスペインでは一息つく」のだが、「そこにやってきたときには、時間や空間の中をよろめかんばかりになってさ迷っていた衰退した民族」であったのである⁷⁾。

(3) ゲルマンの封建主義

—ゲルマン人とローマ人—

ところでオルテガは、ある民族の歴史において、「その民族独特のある種の現象が皆無か、もしくは少ない場合、その民族は病んでおり、衰弱しており、生命力を失っている」と言っている。民族は「幾つかある生存様式の中から一つを選択できる」のではなく、「自分の型に従って生きるか、さもなくば生きないか」である。ゲルマン人も「独自の型の生命力」すなわち「有機体の創造力」を持っていた。「ゲルマン人は芸術や学問や社会をある一定の方法で、しかもその方法だけで作り上げた」。とくに「社会体制の形成」において、「ゲルマン人に一番特徴的な」「封建制度」を作り上げたのである。オルテガはこうした封建制度という「形式に先立ち、そのような形式がなくなった後も生き続けていた精神」たる「封建主義」的精神を重要視している⁸⁾。では、ゲルマン人の封建主義的精神と

はいかなるものなのか。オルテガはローマ人の精神との対比で、この問いに答える。ローマ精神は「機構としての国家を樹立」したとき、「個々人の存在や行動をその国家、つまり市民の総体 *civitas* に従順な成員としか考えなかった」。これとは「対照的」にゲルマン精神にとっては、「国は腕っぷしの強さと度量の広さから他の人びとに己れを受け入れさせ、その人びとをあとに従わせては領土を征服し、己れを土地の『主』となすすべを心得ているたくましい数人から成り立っていた」。「ローマ人」は「自分たちの土地の『主』」ではなく逆に、「ある程度土地の『僕』」であった。「ローマ人は百姓であった」のに対して、「ゲルマン人は農業を学び、受け入れるまでにずいぶん時間がかかった」し、むしろ「広大な平野と狩のできる森林が目の前にあったにもかかわらず、犁を軽蔑していた」。ゲルマン人は「ローマ帝国の軍隊からなる柵が弱くなる」と、「南部や西部の肥沃な田畑を手に入れ、征服した民族にその耕作を引き受けさせ」、「自分では耕作しない」という形の「土地支配」を「領主権」として確立したのである。この土地支配の権利は、「ゲルマン人とは違った生の感覚、したがって権利の感覚の内に閉じこもっている」「ローマ人とか民主主義者」とは異なり、「この土地に対する余の権利は、余が戦いでこれを手に入れ、これを失わないためには、必要であろうすべての戦いに応じる心づもりでいるということにある」というゲルマン領主の信念によって支えられていたのである⁹⁾。したがって、「ゲルマンの領主に関心のある」のは「土地の経済的所有権」ではなく「権威権」であり、ゲルマン人は実際には「領地の所有者ではなく、むしろその『主』」なのである。ゲルマン人の精神は「資本家に宿っているのとは根本的に反対」なのであり、「彼の欲しているのは儲けることで

なく、支配し、判断し、家来を従えておく」ことなのであった¹⁰⁾。したがって、「誰が支配しなければならないか？」という支配の正当性についての質問に対する回答は、ゲルマン人に言わせれば、「支配できる人が」ということになるのである。これは、「力によって権利の代わりをさせようとしているのではなく、他の人に自分を受け入れさせる能力の中に、他の人よりもその人の価値が高く、したがって命令する資格があるという争えない印を見て取らせようとしている」のである。ここでの権利は「その人の資質と一体である」と考えられているのである。「人間は生まれたとき、原則としてすでに十全な権利を持っている」という「ローマおよび現代の考え方」とは対照をなす「ゲルマン精神」は「個人主義ではなく、人格主義」なのである。ゲルマン人の感覚では、「権利はその本質自体からして自分で手に入れねばならず、獲得した後は、それを護持しなければならない」のである。それゆえ、「彼がこの上なく執拗に護持していた特権」は、ほかでもなく「他人との争いを法廷に持ち込まず」に、「お互いの間で槍を取り、体を張って解決すること」であった。この特権がなくなると、「法廷の非人格的裁決を避けて」、わが国の古い年代記が『内密』または『秘密会談』と呼んでいる制度、方法を考え出した¹¹⁾のである。それゆえ、こうしたゲルマンの領主たちが「新しい国家を組織する力となっていく」とき、「ローマにおけるように、市民国家とか、集団の観念とかの非人格的観念からではなく、数人の生身の人格から出発している」のである。したがって「ゲルマンの国家は領主間の人格的、個人的な一連の関係より成り立っている」のである。現代人の意識にとっては、「権利は人格に先行するものであり、権利は承認を前提とするので、国家もまた人格に先立つ

であろうこと」は明白であり、「今日、いかなる国家にも属していない個人は権利を持たない」のである。ところが、「ゲルマンにとって正しいのはその逆」である。彼らにとっては、「権利は人格の属性としてのみ存在する」。換言すれば、「人は国家が定め、規整し、保証している権利を持つから人格であるのではなく、その反対で、まずもって生きた人格であるから権利を持ち、この法以前の人格性の段階や能力に応じて、一般にあれとかこれとかいった権利を持つ」のである¹²⁾。

(4) 封建制度の欠如

—フランスとスペイン—

かくして「ゲルマンの領主たちのこの人格的行為」は、「西欧の諸国家を彫り上げた鑿」に例えられる。それぞれの領主が「領国を組織し、それを領主の個人的影響で満たした」。「隣接する諸領主との戦いや友情や諸関係は、ますます大きな単位の領地を生み出していき、最後には広大な公爵領を形成する」に至ったのである。「国王は、もとはといえば同程度の力量の持ち主の間で第一人者 *primus inter pares*」であったが、「この有力な少数者の数を減らそう」とたえず願い、『民衆』の中に、つまりローマ思想により所を求めるのである。そして「ある時期には『領主』たちが敗北したように見え」、「君主—平民—僧侶という系列の統一主義が勝利を収める」。しかしフランク族の場合は「領主の力は盛り返し、しばらくすると封建組織が再度現われる」のである¹³⁾。フランスには「数多くの、しかも強力な封建領主」が存在していた。フランスの領主たちは「国家の歴史的体制を整え、国民集団の最後の一人に至るまで国家形成の理念で頭を満たした」。かくして「フランスの国家組織が何世紀もの間、無数の分子に分裂して生きる必要があった」ので

ある。これらの領主は「内部的統一のできる成熟期に達するに従い、互いに結合し、より複雑で広汎な組織」となり、最終的には「州や伯爵領や公爵領」になったのである。したがって「『領主』の力」は「未熟な段階」では「王国に統一することに反対し、あの必要な領土上の複数性を守った」ということなのである¹⁴⁾。

こうしたフランスに比べてスペインの場合、その「封建制度の軟弱さ」が指摘される¹⁵⁾。というのは、スペインに到着したゲルマン民族たる「西ゴート族はスペインにやって来たとき」には、彼らは「すでに憔悴し衰退しており、すぐれた少数者を擁していなかった」のである。西ゴート族はイスラムという「アフリカからの一陣の風で」「イベリア半島から霧散」し、その後「イスラムの潮が引く」と、「じゅうぶんな少数者の貴族がいないまま、すぐ君主と民衆で諸王国」が建設されたのである。オルテガは「栄（はえ）ある国土回復の八世紀」という虚偽の偉業を「八世紀もかかって行なった事柄がどうして回復と呼べるのか」と皮肉って、「もしスペインに封建制度が存在していたなら、生の横溢、有り余るエネルギー、最高の歴史的スポーツのすばらしい例である十字軍が他の国にあったように、スペインにもたぶん、真の国土回復があったであろう」と言うのである。彼は「スペイン衰退の兆候をより容易に明らかにするには、当該問題をヨーロッパ史の中で最もよく知られている時代、つまり中世に限る」べきだと主張し、さらに「スペインの衰退は中世でも、近代や現代におけるより劣るものでなかった」とさえ言うのである。オルテガの見るところ、「スペイン史にはたいへん澁刺とした時期もあった。全世界的栄華、栄光の時代さえあった」が、しかし、「わが国の過去では変則が正則であったという明

白な事実が目につく。そこからわれわれは、スペイン史全体は、ごく短期間を除いて没落の歴史であった」と言えるのである。つまりオルテガに言わせれば、スペインの衰退は、「構造上の不備、もとの、生来の欠陥」、「その主体の外的ではなく、内的、つまり構造上の原因」に基づくものであり、「この主体はかつて健康だったためしかなかった」ということなのである。以上からしてオルテガは、「現代のあらゆる問題をスペインが形成された時代、つまり中世」に求め、「歴史研究に従事する資格のあるすべての青年に対して」「枝葉末節にとらわれず、中世とスペインの誕生を研究するように」と忠告を与えるのである。「スペインの大問題の秘密は中世にある」のである。オルテガはこうしたスペインの中世の貧弱さを例証するために、「わが國中世の年代記とフランスのそれ」を読み比べる。すなわち、「フランスの年代記編者およびそこで取り上げられている人物にとっては、この世界は無数の局面を持った輝かしい現実である。これらすべての面には、これまた同じくらい多くの感受性が対応する。そこには信仰と懐疑、気力に満ちた戦争、途方もない野望、知的好奇心、官能的悦楽がある。人びとは女に言い寄り、花に微笑み、敵を打ち負かし、森を、牧場を楽しむ」。逆に「スペインの年代記では生活はごくわずかな刺激と反応に限られているのが常である」のである¹⁶⁾。

(5) イベリア半島統一とアメリカ植民開始 —イギリスとスペイン—

かくしてオルテガは、「わが民族の最も重大かつ永続的な欠点の一つ」として「量および質において、じゅうぶんな選ばれた少数者がいないこと」を強調し、「スペインの封建制度の発育不良は、すぐれた少数者が

初めから不在であり、『すぐれた者』はわが国誕生の時代以前にすでに欠けていた、要するに、わが国の受胎は欠陥を含んでいたこと」を指摘するのである¹⁷⁾。彼によれば、『領主』の「僅少と弱体」は、「わが国の中世を苦しめた力の欠如」を説明し、これ自体がまた「スペインの一大世紀である一四八〇年から一六〇〇年の間の力の過剰」を説明しているのである。つまり、「一四五〇年ごろにわが国が置かれていた哀れな状態から五十年あまりの間に、新世界においてかつて見られなかった大勢力、つまり過去においてはただローマのそれとのみ比肩しうる大勢力にのし上がった事実」、「一四五〇年から一五〇〇年の間に起こった「ただ一つの新しい重大な出来事、つまりイベリア半島統一」の事実を指摘するのである。この統一は、スペインに「国王の手の中にあらゆる力、可能性を結集した最初の国家であるという名誉」を与えた。「封建制度の多元性」が「フランス、イギリス、ドイツの力を分散」し、「自治都市的原子論」が「イタリアを分割していた」の対して、「スペインは引き締まった、柔軟な組織になった」のである¹⁸⁾。

しかしながら、スペインは「一五〇〇年代」に「台頭したのとおなじ急激さ」で、「一六〇〇年代」には「その下降が起こった」のである。すなわち「統一は人工的隆盛の注射として効果はあったが、真の生命力の発露ではなかった」のである。「スペインは虚弱だったし、また封建的な偉大な人物にささえられた強力な多元性に欠けていたので、統一はきわめて迅速になされた」だけであったのである。これに対して隣国フランスでは、「フロンドの乱によるすばらしい振動が、十七世紀の最中でもまだフランス全体を揺り動かしていた」のであり、これはまた「フランス人がフランク族から受け継ぎ保持していた、いまだに無

傷の生命力の宝」の賜物なのである。それゆえ、スペインの場合、封建制度についての「通常の価値評価をさかさまにするのが適切」なのである、とオルテガは主張するのである。すなわち彼の見る所、「封建制度の欠如は一般に健康と考えられていたが、スペインにとっては不幸であった」し、「早急な国家統一は栄光の印と思えたが、実はそれに先立つ衰退の結果であった」のである¹⁹⁾。

さらにオルテガは、「イベリア半島統一の第一世紀」と時を同じくする、スペインによる「アメリカ大陸の植民の開始」についても言及する。つまり彼は、「スペインによるアメリカの植民は民衆による事業である」と指摘する。オルテガはスペインによるアメリカ植民とイギリスによるそれとを比較するのである。すなわち、「イギリスによる植民」は「選ばれた力強い少数者によってなされ」、「すぐに大『会社』がその事業を引き受け」たのである。「イギリスの『領主』」は、「彼らの専業であった戦いを放棄し、商工業を尊い仕事として受け入れた最初の人びと」であったのである。オルテガの洞察によれば、「イギリスでは封建主義の大胆な精神がきわめて迅速に戦闘性の少ない他の事業へうまく移行」し、ゾンバルトの指摘の通り、「近代資本主義を生み出すのに大いに貢献」したのである。ここでは「軍事的営為は産業的営為に、勇士は企業家になり変わった」のである。それは、「中世を通じて」「たいへんな貧乏国であった」イギリスでは、「封建『領主』は戦利品を求めて定期的にヨーロッパ大陸を襲わなければならなかった」が、これと同じ行為が植民地においても実行されたからである。それゆえ、「イギリスによる植民」は「共同経済の形にせよ、神によりよく仕えることのできる土地を求めた、選ばれた集団の本国からの離脱によるものにせよ、少数者の熟慮した上での行

動」であったのである。これに対して、「スペインによる植民」には「意識した意図も、指揮者も、熟考した戦術もなく」、「場あたりに数々の国を生み出したのは『民衆』であった」のである。「スペインによる植民の栄光と悲惨の双方はここから出て来る」のである。オルテガの見るところ、「スペインの『民衆』はやらねばならぬことをすべてやった」、「彼らは植民し、耕作し、歌い、悲しみ、愛した」のである。しかし「スペインの持っていないもの、つまり高度の学統、生彩を放つ文化、進歩的な文明など」を、スペインが「生みだした国に与えることはできなかった」のである。それゆえ、「スペインでは『民衆』がすべてを行なったし、『民衆』が行なわなかったことはなされずに終わった」と言うことができるのである。しかしオルテガが言明するところ、「国家は『民衆』だけではありえない」のであり、「生きた肉体が筋肉だけでなく、その上に神経節、脳中枢でもあるように、国家はすぐれた少数者を必要とする」のである²⁰⁾。

(6) 1580年以後のスペイン

さて、オルテガは「一五八〇年から今日までにスペインで起きたことは、それがすべて衰退と分裂であった」と言う。彼の見るところ、「統合の過程はフェリペ二世の代まで上昇し」、「彼の治世の二十年目を、イベリア半島の運命の分水嶺と考えることができ」、「その頂点まではスペインの歴史は上昇的であり、集積的であった」が、「それ以降われわれの時代まで、スペインの歴史は下降的、分離的」となるのである。「分裂の過程は、周辺部から中心部へという順序を守りながら進化した」のである。つまり歴史的にはスペインは、「まずフランドル地方とスペイン領ミラノが、次いでナポリが離れた。十九世紀初

頭には海外の大きな諸州が離れ」、「その世紀の末にはアメリカと極東の小さな植民地が離れていった」のである。「一九〇〇年にはスペインの領土は元の半島だけになってしまった」。オルテガの観察するところ、「海外領土の離脱は半島内部の分裂現象のはじまりを告げる」がごとく、「一九〇〇年には地方主義、独立主義、分離主義……のざわめきが聞かれ始めた」のである。この情景をオルテガは「数世紀にわたる長い秋の悲しい光景だ。間を置いて突風が吹いては、枯れ枝から枯れ葉をもぎ取って行く」と表現している²¹⁾。

Ⅲ 分立主義—他者との共存の拒否—

オルテガは、「統合の過程は結集の作業から成り」、「かつて離れ離れだった社会集団が一つの全体の部分として統一」されるが、「分裂はこれとは逆の現象」で、「全体の部分であったものが、それぞれ一つの全体として別々に存在し始める」と言う。彼は「このような歴史的生の現象を分立主義」と呼び、これが「スペインの現状において」「最も深刻かつ重大」な現象であると主張している。

(1) カタルーニャとビスカヤの分立主義

この分立主義の代表格が「カタルーニャ主義」と「ビスカヤ主義」である、とオルテガは考えている。彼によれば、この「二つの運動は、わが国が陥っている分裂状態の顕現以外の何物でもない」。つまり、「三世紀前に始まった分裂現象がこうした運動となって連続しているのである」²²⁾。では、その分立主義とは何か？オルテガは「分立主義の本質は、各集団が自己を部分として感じなくなり、その結果、他の者と感情を共有しなくなる」とであると言っている。そうした各集団にとっては、「他者の希望や必要はどうでもい

いこととなり、他人の希望がかなえられるのを助けようとして連帯することもない]、「ある地方が困難な問題に悩んでいても、それに対する同情がつぎつぎに伝わって他の国家構成要素を心配させることがないので、その地方は自らの不運と衰弱の手に委ねられたままとなる」のである。分立主義のこのような「社会状態では自己の病気に過敏であるのが特徴である。連帯の時代には容易に耐え忍べた腹立ちや困難は、集団の精神が国家的共存から離れてしまった後では耐えがたいものに思われてくる」のである。したがって、「バスク人やカタルーニャ人が、彼らはスペインの他の地方から圧迫を受けている民族だと主張する」のは、「この二地方が享有している有利な立場」という「客観的状況を反映させようとする限りでは不当である」が、まさに「カタルーニャ、バスク地方が置かれている主観的状況の真の兆候」を表しているのである²³⁾。

オルテガの見るところ、「各地方の条件によって形態は異なるにしても、今日のスペインにはいたるところに分立主義が存在する」。たとえば、「イベリア半島最大の経済力を持つと自任してきたビルバオとバルセローナでは、分立主義は攻撃的で、明白な形をとり、修辭的な飾りも十二分につけている」。それに反して「ガリシアは、自信を喪失し、諦めと懐疑にとらわれた人の住む貧しい地方だが、そこでの独立主義は、出口のみつからない吹出物のように内向化」している。オルテガによれば、「カタルーニャやバスク地方の独立主義」は「自己肯定型の運動」であるのに対して、「ガリシアやセビリャ地方」は「国民的とも言えるニヒリズム」が蔓延しているのである。オルテガの洞察によれば、こうしたスペイン各地方それぞれにおいて「一つの社会が分立主義の犠牲になって憔悴していく

とき]、「最初に分立主義者として現われるのはほかでもなく中央政府そのもの」であり、そして「これがスペインで起こったこと」なのである。すなわち、「カスティーリャがスペインを形成し、カスティーリャがスペインを解体した」のである²⁴⁾。

(2) カスティーリャの分立主義

—スペインの統一と解体—

オルテガによれば、「イベリア半島統合の原初の中核であったカスティーリャは、自らの分立主義的傾向を克服し、イベリア半島の他の王国に向けて雄大な共同生活の計画へ参加するように呼びかけ]、「人の心を奮い立たせるような大規模な事業を考え出し、高度の法的、道徳的、宗教思想に献身し、社会秩序に関して示唆に富む見取り図を描いた」のである。つまり、「すべてのすぐれた者は劣った者より、活発な者は無気力な者より、鋭敏な者は愚鈍な者より、高貴な者は卑俗な者より優先されねばならぬとの規範を押しつけた」のである。「しばらくの間はこのような熱望、規範、習慣、思想はすべて生きいきしていた」し、「人びとはこれに強く影響を受け、元気づけられ、これを信じ、尊び畏れた」のであった²⁵⁾。

しかし、オルテガに従えば、「フェリペ三世時代のスペインをみると、われわれは大きな変化に気づく」。「一見したところでは何の変化もないが、実はすべての物が内容空虚なものと変わり、にせ者の感じを与える」のである。「往時の澁刺としていた言葉は相変わらずくり返されているが、もはや心にしみとおることはない」し、「かつて人びとを奮い立たせていた思想は今では決まり文句に墮してしまっただけ」である。「政治の分野でも、道徳の分野でも、なんら新しい試みがなされない」し、「残っていた活力のすべては、ほ

かでもなく『新しいことは何もしない』ということのために、つまり過去一諸制度、教義一の温存に、あらゆる新しい試みや、革新の試みを窒息させることに費やされた」のである。それゆえ、「カスティーリャは自己と正反対のものに変わり、再び懐疑的で、視野が狭く、けちくさく、とげとげしいもの」になり、「もはや他の地方の生に活力を与えることに気を使うことがなく、むしろ、他の地方を妬み、見捨て、そこで起きていることに無関心になり始めた」のである。かくしてスペインは、「ここ三世紀の間のわれわれの歴史であった、あの愚昧とエゴイズムの長い眠りに陥ること」となったのである²⁶⁾。

この「カスティーリャの恐るべき分立主義」は、「国家を初めとしてそれに次ぐ教会など、国全体に及ぶ権力を持った者はすべて、自分のことしか考えてこなかった」ことに如実に現れている。彼らは「国民とは無縁のもの」であったし、「スペインの君主、教会が、国の運命を深く考えて心痛めたこと」など皆無であった。むしろ正反対に、「国家と教会は自己の個人的運命にすぎないものを、それが真に国全体の運命であるとして執拗に受け入れさせようとし」、「この二大権力は世代を重ねるごとに、スペイン人の間に転倒した選択の仕方を育ててきた」のである。たとえば、「人材の登用にあたりスペインの諸王が示した」ものは、「彼らが必ずといっていいほど知者より愚者を、完璧な者よりも欠点の多い者を選ぶという」、「長い期間にわたる価値判断の倒錯」の「偏向の歴史」であった。しかし、オルテガによれば、「人材の登用においてすぐれた者より劣った者を好むという、この根深い習慣的とも言える誤り」は、「実際には何もやりたくない、何も試みたくない、それ以後は自力で存続するようなものは何物も創り出したくないということの何よりも明

らかな兆候」なのである。「心が気高い願いで満ちているときには、それを実現するに最も有能な者を求めるのが普通である」とオルテガは洞察しているのである²⁷⁾。以上からして、オルテガの観察するところ、スペインの「国家権力は人生観、共同生活の方法、統一事業といった宝について周期的に改革を試みる代わりに、スペインの共同生活を破壊し、その力をもっぱら私的な目的のために使ってきた」し、さらに「もう幾世紀も前から社会権力は、われわれスペイン人が生きているのは、ただ権力に存在の喜びを与えるためなのだと思わせようとしてきた」ため、「スペインは解体に解体を続けて」、「今日のスペインは、もはや一つの国家というより、歴史の大街道を大国が疾走した後に舞い上がっている土ぼこり」と成り果ててしまった、と言えるのである²⁸⁾。

以上のごときスペインの歴史過程においてオルテガはとくに、その「分立主義」の厄災を重視している。彼はカタルーニャとバスクの分立主義について、「カタルーニャ主義、ビスカヤ主義の中で最も重要な点は、まさに、一般に最も気づかれないでいること、つまりそうした運動が、一方でスペインの領土を寸断した数世紀に及ぶ分裂作用の長い過程と共通し、他方において今日スペインの他の地方にさまざまな形で存在する潜在的な分立主義と共通して持っている」ことであると言っている。そうした他の分立主義としてオルテガは「社会階級の間に見られる分立主義」、さらに「職業集団」の間の分立主義などを挙げている²⁹⁾。

(3) スペイン、一つの国家というよりは一連の防水隔室

それゆえ、オルテガの観察するところ、「今日のスペインの社会生活は、この恐るべき分

立主義の極端な例」を示している。「今日のスペインは、一つの国家というよりはむしろ一連の防水隔壁」である。「政治家は他の国民のことを考えていない」とはどここの国でも言われることだが、スペイン社会についてのオルテガの観察はもっと厳しい。彼の言わせれば、「もし政治家にとり、残りの国民が存在していないとすれば、残りの国民にとってはそれ以上に政治家は存在していない」のである。そして「この政治的でない残りの領域」では、「おのおのの職業集団は自己の殻に固く閉じこもって生きている」のである。軍人や産業人、知識人、農民、労働者、貴族など、職業集団は、「他者の域内で起こることには微塵の好奇心も示さず、「お互いに知ることのない天体のように、お互いが上下になりながら回転している」。「各職業集団は自己の問題の中に閉じこもり、隣りの集団の心を占めている問題についてさえまったく知らない」し、「ある職業集団ないしは階級の中に生まれた思想や感情や価値は、他の集団には少しも伝わらない」。「社会組織の他の部分で行なわれている大事業も伝わらず、わずか数メートル先のところでも反響せず、結局、その努力は生まれた所でそのまま消滅してしまう」のである。オルテガの目には、「スペインの社会以上に弾力性を欠いた社会を考えるのは困難」なのであり、「これ以上に社会らしくない人間の集まりを想像することはむずかしい」と見えるのである³⁰⁾。

こうした「分立主義の心理分析」をオルテガは、次のようにまとめている。「分立主義」は、「ある階級や職業集団の中になんらかの原因から、自分たち以外の階級は十全な社会的実体として存在しないとか、それほどでなくとも、存在するに値しないと考える知的虚像が生じたとき」、現れるのである。つまり、「分立主義」とは、「われわれがなぜ他者を考

慮しなければならないのか分からないと考えるとき」の「精神状態」である。そのとき「われわれはときには自分自身に気する過大評価からまたときには他者の過小評価から自らの限界の観念を失い、自分を完全に独立したものであると感じ始める」のである³¹⁾。

(4) 軍人という職業範疇

前述の「防水隔壁の具体例」としてオルテガは、「軍人という職業範疇」を例にあげ、これを「少し修正するだけで、それを他のグループ、職業集団に当てはめることができる」と言っている。オルテガの見るところ、スペインの軍隊は「植民地戦争と米西戦争が終わってみる」と、「根本的な打撃を受け、精神的に解体状態」に陥ってしまった。つまり軍隊は「国民という集団の中に解消されてしまったのである。「誰も軍隊のことなど考えず、軍隊にしかるべき責任を問うことさえしなかった」。しかも「人びとの意志が一致して、もう金輪際戦争事にはかかわらぬとの取り消し不能の決議をいとも簡単に決然とした態度で採決した」のである。「軍人自身も心の奥では、この決議に賛成していた」のである。スペイン軍隊のこうした事態は、オルテガに言わせれば、「国家的共同生活をダイナミックに解釈する必要性」、つまり、「集団に規律や構成や連帯感を与えうるのは、いつの日か偉業をなすという計画だけだ、ということを知る必要性」を示す好例となる。すなわち、「軍隊は戦争の可能性を奪われた日にはもはや存続できない」のであり、「可能な戦闘のイメージが、せめてその幻影が、その神秘的、霊的圧力を現在の軍隊の上に加えられねばならないのであり、「軍隊を整備し、それを維持して行くには、有益なものはいつかは活用されるという考えが必要」なのである。「戦争の可能性なくして、軍隊のモラル

を維持し、規律を堅持し、軍隊の有効性になんらかの保証を与えることはできない」のである³²⁾。

オルテガによれば、「一九〇〇年以降ほとんど大部分のスペイン人が心の内で犯してきた矛盾」は、「軍隊を持ちながらそれに活動の可能性を認めない」ということであった。「ひとたび戦争は起こらないだろうと決まると、他の階級や職業集団の人間は軍人に関心を払わず、軍人世界に対して鈍感」になり、対して「軍人世界は孤立し、国家構成要素でもなくなり、社会の他の部分との関連を失い、内部でも分裂」をきたし、「その反動」として「感情的離反でもって自動的に反応を示す」ようになったのである。すなわち、「わが国の軍人の間には政治家、知識人、労働者（この列挙をもっと続け、充実したものにするが）に対して深い疑念」が生じ、「軍人集団の間に、他の階級に対する怨恨と反感が生まれ、軍人の集団はますます内向的となり」、「軍隊は一思想、意志、感情の面で一周囲から影響を受けることも、周囲に影響を与えることもなく、まったく自己の基盤だけに寄りかかって生き始め」、「自己閉塞を起こして自分の心のなかに閉じ」こもる一方、「心のなかでは分立主義が芽ばえ」ていたのである。

1909年のモロッコへの軍出動以後は、「軍人集団は装弾されながらも、撃ち込むべき標的を持たない銃」となった。「軍隊は国家の他の諸階級から切り離され—これらの階級も互いの間でそうなのだが—他の階級のことを考慮することも、また他の階級から加えられる抑止力も感じず、うっ積した憤懣を晴らしたいと思いながらも、それを発散する適当な事件を見いださず、たえず不安の中におかれていた」。こうした「全過程の避けがたい結末」として、「軍隊」は「自分の国そのものに襲いかかり、それを征服したい」と考え

たのであった。それが「あの有名な一九一七年七月の反乱」であった。あのとき「軍隊は一瞬、自分がスペイン全体の一部、それもほんの一部にすぎないのだという意識を完全に失っていた」。軍隊は「分立主義のために、存在するのは自分だけであり、自分が全体であるという幻想を抱くようになった」のである³³⁾。

(5) 直接行動

以上のことはオルテガの見るところ、「スペインのほとんどすべての構成要素についても」起こり得る事態であり、スペインの「いかなる集団にも、国家組織への信頼を忘れ、他の同胞集団への感覚が鈍り、自分の使命は自分の意志を直接押しつけることであると信じた時期があった」のである。すなわち「あらゆる分立主義は、最後には不可避免的に直接行動に向かう」のである³⁴⁾。彼の見るところ、「今日、集団や階級の意識の奥底で苛立ちや狂乱をひき起こしている」のは、「心の底で軽蔑し合うか憎み合うかしている他者を考慮しなければならない」ということである。そして、「現在各階級の人間を満足させている社会的行動の唯一の形態」は、「自分一人の意志を直接押しつけること、要するに、直接行動」なのである。「直接行動」についてはオルテガは、「この言葉は労働者階級のある戦術を名づけて作られた」が、「実際には今日、社会的な事柄に関してなされているすべてのことをそう呼ばねばならない」と言っている。そして「この直接行動の特徴として表面に出る強烈さと露骨さ」は、「各集団の持つ物理的な力にのみ依存する」と指摘している。オルテガによれば、「労働者は、彼らの分立主義的態度の論理的帰結からこのような戦術を考え」、「今日の社会に連帯責任を負わず、他の社会階級は寄生的、つまり反社会的である

から、生存権を持たないと考え、「彼ら労働者は社会の一部でなく、彼らこそ社会そのものであり、正当な政治的存在の権利を持つ唯一の者」と確信しているのである³⁵⁾。

この直接行動についてオルテガは後著の『大衆の反逆』で一層考察を深め、「大衆人」がその「魂の閉鎖性」ゆえに「社会生活全般」に「介入するときにとる唯一の方法」であると指摘している。彼ら大衆人の目的は「討論を絶滅する」ことであり、彼らは「日常の会話から学問を経て議会にいたるまで、客観的規範に対する敬意を前提としているいっさいの共存形式」を嫌悪する。彼らは「規範のもとでの共存である文化的共存を見捨て、野蛮的共存への逆行」を断行し、「あらゆる正常な手続きを省略し、直接的に自分の望むことを強制する」のである。オルテガによれば直接行動とは、「力を最後の手段（理性）ultima ratio にしようとする試み」である文明や道理や正義に対して、「今までの順序を逆にし、暴力を最初的手段 prima ratio、厳密にいえば唯一の手段であると宣言している」。彼は「暴力とは、あらゆる規範の廃棄を提案する規範であり、われわれの意図とその実施の間に介在するいっさいの中間段階を廃止する規範」であり、「暴力は野蛮の大憲章 Charta Magna」であると非難するのである³⁶⁾。

オルテガは、こうした「直接行動を分立主義、すなわち、他者を考慮に入れたくないという感情から必然的に出てくる戦術」と指摘する。そして「他者を考慮しないということの直接の原因は洞察力、つまり知的注意力の不足」にあり、「われわれ自身が愚かであり、われわれの直観と知識欲の視野が狭ければ狭いほど、それだけわれわれの世界を満たすものは少なく、隣人がいるということも忘れやすくなる」と批判するのである³⁷⁾。

（6）決起宣言

オルテガは「直接行動とその原因になっている愚かさ」の「兆候」を、「十九世紀スペインの歴史の中に」現われる「あの伝統ある『決起宣言』」に見出し、「その二つの特徴」を明らかにしている。つまり、「英雄的気性と際立った天真らんまんさ」が魅力の「あの大佐將軍連中」はまず第一に、「瘋癲かばかのように自分の『理念』に確信を持っていた」、しかも「自分だけの了解とは考えず、同時に他のすべての人も了解している」と考えていた。「彼らは、適当な方法で他人を説得しようとする努力が必要だとは考えない」のである。それゆえ第二に、「彼らにとっては、問題になっている考えを表明する、つまり『宣言する』ことだけでじゅうぶん」であり、「將軍とか大佐は、彼らが兵舎で『大声』を張り上げれば、広いスペイン全体が同調的に共鳴するだろうと信じていた」のである。「自分たちを助ける大きな集団とか、多くの戦闘員をあらかじめ準備すること」に気を配らず、「『宣言者』たちは、勝利を得るには熾烈な戦いが必要だ」とはつゆにも思わず、「ほとんどの者が心の内では彼らと同じように考えていると確信していたので、言葉を『発すること』の不思議な効果に盲信を抱いていた」のである。したがって、「彼らは戦おうとしていたのではなく、公的権力を手に入れようとしていた」わけである。かくしてオルテガは、「最近数年間に見られるほとんどすべての政治的な運動は、『宣言』の持つ二つの性格を再生している」と考えているのである。

オルテガはここで「闘士の心」と「勝者の心」について論じ、「闘士の心と勝者の心ほど懸け隔たった精神状態はない」と言う。「ほんとうに戦いたいと望んでいる人間」は、「まず敵がいる、敵は強い、したがって危険であり、用心すべきであると考え」、「できるだけ

の協力を集めよう」とし、「自分の旗の下に可能な限りの力を結集しようとして、気のきいた説得、詭弁、親愛の情、さらには狡猾さといったものまで、あらゆる手段を尽くす」。これに対して、「勝者であると思いついて人間」は「これとは反対の振舞いをする」。「彼は敵に注意を払わず、油断し」、「知恵をめぐらす必要はなく、助力を求めて人にへつらう必要はなく、人の気をひき付けておくような広く、豊かな才を装う必要」もなく、「逆に戦利品を少数者の間で分配しようとして軍隊を縮小しようとするであろうし、そしてまっすぐにつき進んで、征服したものを自己の所有に帰すであろう」。要するにオルテガに言わせれば、「直接的行動とは勝者の戦法であって闘士の戦術ではない」のである³⁸⁾。

オルテガの見るところ、「ここ数年間に突発した政治運動のいずれをみても、そこで採られた戦術は、そういう運動が戦うためではなく、反対に、あらかじめその戦いに勝つたものと考えるところからきている」。たとえば、「一九一七年」の「労働者や共和主義者たち」による「小革命」は、「社会の流れの只中に放置されているかのように見えた公的権力を掌握できるチャンス」と思い、「これらの社会主義者や共和主義者は、他の誰をも考慮に入れたがらなかったし、他の国民に熱烈な言葉や度量のある言葉で呼びかけさえもせず、「大部分のスペイン人は彼らと同じことを望んでいる」と思い、幾つかの町の、これまた幾つかの地区で『大声』を張り上げようとした」のである。さらにまた「その数年前」に現れていた「マウリズム」についても、「ドン・アントニオ・マウラは少なからぬ成功を収めながらも、『宣言』するという誤りを犯し、「フロック・コートを着た、もったいぶった『宣言者』」となったのである。マウラは、「政治慣習に対する憎悪のために社

会生活から離れているが、質的にも量的にも最も重要なスペイン人の一団」が実在し、「この『中立集団』は自分と同じ信念に燃えており、厳格で権威的な顔つきを好み、熱烈に伝統的なカトリックを信仰しており、十七世紀スペインのバロック的散文を楽しむ」と考え、「スペインの胴体を成すこの集団が、社会生活に目ざめるには『大声』を張り上げるだけでじゅうぶん」であり、「投票を義務づけ、その根深い無気力に少し鞭を与えてやればそれでよかった」と思っていたのである。これに対して、「初めから彼と意見の一致しないその他の者」は「地獄に落ち込んだも同然」であり、「そういう人間を側に引き寄せ、説得し、正すよりも、そういう者を排除し、除外し、遠ざけ、善人と悪人を区別する魔法の線を引くことがたいせつ」と考えたのである。ここからマウラの、「有名な『われわれは、われわれの同調者だけを認める』が引き出される」のである。「ドン・アントニオ・マウラは最高潮にあったときも、まだ納得のいっていない人びとを説得しようとする身振りを少しも示さなかった」のである³⁹⁾。以上からしてオルテガは、「われわれスペイン人には闘士の持つ心の底からの情熱が欠けており、勝者の持つとげとげしい傲慢さがあり余っている」、「われわれは戦うことを好ま」ず、「われわれはただ征服だけを欲し」、「幻想に生きることを望み、気の迷いから、カフェでの集まりとかサークルとか、軍隊の軍旗保管室とか、あるいは単にわれわれの想像の中といった狭い範囲で自分は勝者であると宣言して満足している」と非難するのである。

それゆえオルテガは、「スペインが統合の時代に入ることを望み、真剣に勝利を望んでいる者は、他者を考慮に入れ、力を結集し、ルナンが言ったように『あらゆる排斥を排斥』しなければならぬ」と忠告するのである。

さらにオルテガは彼自身の1915年の次の見解を引用している。「われわれは現今の政党のいずれにも属さない。なぜなら、政党がお互いを区別している相違は、せいぜいのところ言葉の上での違いであって、実際の意見の違いに相応したものでないからだ。明日という日に、新しくたくましい政党が期待できるように、今日の政党を統一しなければならない」⁴⁰⁾。また、「最良の政治」を暗示するものとして「サンチョの慎ましい金言『小牛を連れて行くときは、縄をつかんで走れ』」を挙げて、スペイン人は「縄をつかんで走ろうとはせず、すべての小牛をばらばらにしてしまう決心をしたよう」に見えるかと嘆いている⁴¹⁾。

IV すぐれた者の欠如と民衆の支配

以上のスペイン史の考察からして、オルテガは「『すぐれた者』の欠如、少なくともその不足はわが国の歴史全体に作用」しており、「同じような条件から生まれた他の国々が正常であったように、わが国がじゅうぶん正常であろうとするのを妨げてきた」のであると言う⁴²⁾。スペインでは、「『すぐれた者』が欠如していたために大衆は、つまり『民衆』は、劣った人間とすぐれた人間を見分ける力を長い間なくしていた」のであり、その結果、「わが国にすぐれた人物が現われたときにも、『大衆』は彼らを活かすことができず、しばしば彼らを台無しにしている」のである。スペインにおいては「最も古い法律の間にもその流れがあり、スペインの慣習法に大きく影響している自称民主主義的空気」は、「どちらかと言えば、大衆に抜きん出ようとする、したがって彼らを指導しようという大きな志を抱いて現われるすべての者に対する純然たる嫌悪」であり、「深い疑惑」である。それゆえオルテガは、「われわれは『民衆』中心の国民、

つまり百姓民族であり田舎気質の持ち主」であると言うのである。なぜなら、「すぐれた少数者のいない社会の最も特徴的な兆候は田舎主義」だからである。オルテガに言わせれば、「ピレネーを越えてスペインに入ったとき、人はつねに百姓国に着いたとの印象を持つ」のは、「その容姿、その思想・感情の総体、その美德・悪徳」が「典型的に田舎的」だからである。「三千年の歴史を持つ市セビリヤの街路では、田舎人の風貌以外に滅多にお目にかかれ」ず、「金持の田舎人と貧乏人の田舎人の区別はできるだろう」が、しかし「都市化がその厳しい淘汰作用を通じて、住民の中に三千年の市にふさわしい一つの型の間人という製品を創り出すとき、彼らに刻みつけたであろう容貌の洗練さが欠けているのに気づく」のである⁴³⁾。

オルテガに言わせれば、「いかなる民族も、支配すべきでない者が支配を願う時期を通りぬけてきたが、強力な本能が人びとのエネルギーを結集させ、そうした支配への不正な欲求を排撃し、「一時的な変則状態を拒絶し、そして彼らの社会道徳を再建した」のである。しかし、「スペイン人が行なったのはこの逆のこと」である。彼の観察するところ、「スペイン人は自己の内面意識が拒絶している者による支配に反抗する代わりに、その第一の不正に適応するため、自己の全存在を偽造する道を選んだ」のである。「わが国にこうした状態が続くかぎり、スペイン民族に何かを期待するのは無駄」であり、「その国家が、つまりその支配権力がもっともと欺瞞的である社会は、歴史のなかにおいて品位を保ちながらおのれを持す、という難事に耐えうる柔軟な力を持ちえない」のである⁴⁴⁾。

オルテガの見るところ、「その正否はともかく、スペインは世界の歴史に参与してきたのであり、最高の世界統治の試みをなして

きた西欧の国家群に属している」が、「わが民族の長年の重大な欠点」は、つねに「百姓的 fellahs, mujiks 民族、すなわち『貴族』を持たない民族」、すなわち「百姓化された fellahizado 民族」に「似た方向にスペインの道をそらせてきた」のである。そうして、「十五世紀末にはスペインのエネルギーのバネが突然はじけ、わが国は地球上で前代未聞のすばらしい跳躍を行なった」が、「百年後には、いまだにぬけ出せずにいる歴史的無気力に再び陥り、その血管には百姓の脈の悠長さで血液が循環している」のである⁴⁵⁾。かくして「スペインがこの数世紀の間、支配と服従の関係をあいまいな形にして生き続けてきた国だ」という事実が、わが国の平均人に非常に大きな内面的荒廃と墮落を生みだしている」とオルテガは指摘するのである⁴⁶⁾。

しかしながら、スペインの未来についてのオルテガの見解によれば、「スペインが『近代』国家でなかったということ、少なくともじゅうぶんな程度においてそうでなかったということは、今日ではわれわれをそれほど落胆させないに違いない」。というのは彼の洞察に従えば、「あらゆるものが、いわゆる『近代』の終焉を告げて」おり、「近いうちに新しい歴史風土が人間のかずかずの運命を育み始めるだろう」。「すでにあらゆるところに新時代の前哨が出現して」おり、「今までとは違った知的原理や感覚形式が人間の生に、少なくともヨーロッパの生の上にその支配を始めている」のである。別の言い方をすれば、「個人や集団生活の機能は別の規範によって統べられようとしており、そこで競争に勝つためには今まで勝利をもたらしていた才能や手腕とはずっと異なったものが必要であろう」とオルテガは予言しているのである⁴⁷⁾。

したがって、オルテガの理論によれば、「もしある種の民族—フランス、イギリス—が近

世で十二分に実を結んだとすれば、それは疑いもなくその性格の中に『近代的』な原理や問題との間に完全な親近性があったから」であり、「事実、合理論や民主主義や機械論や産業主義や資本主義は、一面から見れば、近世の世界的問題や傾向であるが、他面から見ればそれらは、フランス、イギリス、部分的にはドイツ特有の傾向」であったが、「それはスペインの性向ではなかった」。しかし彼の洞察するところ、「今日では、そのような思想や実践上の原理は生を刺激する力を失い始めたよう」であり、それは「おそらくこのような原理が与えたものが、すっかり引き出されてしまったから」である。そしてこのことは「必然的に」フランスやイギリスなどの「大国の潜在力の低下をもたらすだろうし」、スペインのような「小国はその性格や欲望の内的規範に従って、生を立て直すためにこの機会を利用できる」ということなのである⁴⁸⁾。

V おわりに

以上、筆者はオルテガの提示した「封建制度の欠如」と「分立主義の蔓延」の観点から、スペインの歴史を概括・考察してきた。封建制度の欠如はスペインの歴史に「すぐれた人物の欠乏」をもたらし、また分立主義の蔓延は「他者との共存の拒否」をスペインの社会生活・政治生活に刻み込み、スペインの歴史を「『民衆』中心の国民、つまり百姓民族」という大衆の支配に任せたのである。しかしオルテガはフランスやイギリスのような大国が活躍した「近代」という時代が終焉すると言われる今後の歴史においては、スペインのごとき小国がその内的性格や内的規範に従って、有望な未来を展望・獲得できる可能性もありうると示唆しているのである。

<註、引用>

1) Graham, John T.:The Social Thought of Ortega y Gasset A Systematic Synthesis in Postmodernism and Inter disciplinarity, 287ss, University of Missouri Press, 2001: Raley, Harold C.:José Ortega y Gasset Philosopher of European Unity, 61ss, The University of Alabama Press, 1971

2) Ortega y Gasset, J.:España invertebrada (1921), Obras Completas, Tomo III , 109, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、無脊椎のスペイン、335、白水社、1969;Graham, John T.:Theory of History in Ortega y Gasset "The Dawn of Historical Reason", 35, University of Missouri Press, 1997

* グラハムによれば、オルテガは『無脊椎のスペイン』で、二つのテーマを追求している。第一は、その概念をモムゼンの『ローマ史』から借りてきた「統合」・「共生」のテーマであり、これは「歴史的諸民族グループの分立主義の上にスペインの国家的政治統一」を意図する。第二はおそらくはコントカパレートから借用した「エリートと大衆」のテーマである。

3) Ortega y Gasset, J.:La rebelión de las masas (1930), Obras Completas, Tomo IV , 242, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、大衆の反逆、196、白水社、1969

* さらにオルテガは「人間はその最も本源的な構造からして社会的であるから、厳密に言えば直接的には共同体にのみ影響を与えるにすぎない変動によって、個人の本質までも攪乱されてしまうのである。したがって、一人の個人をとりだして彼を分析すれば、それ以外の資料がなくても、彼の国における支配と服従の関係がどのような状態にあるかが分かるの

である」と言っている。

4) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 109-110; 前掲訳書 無脊椎のスペイン、335-336

* またロシアについてオルテガは次のように言っている。「スラブ国家は途方もなく大きな民衆の塊であって、この民衆の上でちっぽけな頭が揺れている。ロシア人の生に作用していたすぐれた少数者がつねにいたことは確かだが、民族の大きさに比してその数が微々たるものであったから、民衆の巨大な血漿を組織化の影響力で満たすことは一度もなかった。ここからロシア人が示している原形質的で不定形の、いつまでも原始的な様相が出てくる」。

5) Ibid., 110-111; 同上訳書、336-337

6) Ibid., 111-112; 同上訳書、338-339

7) Ibid., 112-113; 同上訳書、340;Raley, Harold C.: op. cit., 79

8) Ibid., 113; 同上訳書、341

* 封建制度についてはオルテガは、「この用語は不適切であり、混同の危険はあるが、その使用は慣用となっている。厳密には『領主』あるいは『貴族』相互間の関係を定めるために、十一世紀来とられてきた法律上の諸形式全体だけを封建制度と呼ぶべきであろう」と言っている。

9) Ibid., 113-114; 同上訳書、341-342

10) Ibid., 115; 同上訳書、343

11) Ibid., 115-116; 同上訳書、344-345

12) Ibid., 116-117; 同上訳書、345-346

* 具体的な人物としてオルテガは、「エル・シッドはカステリーヤから追放されたときには、いかなる国の市民でもなかった。にもかかわらず、あらゆる権利を持っていた。失った唯一のものは、国王との個人的関係とそこから生じていた俸禄とである」と指摘している。

13) Ibid., 117; 同上訳書、346

*オルテガは「ところで、ヨーロッパ諸国家の胚胎期には、今の社会ですぐれた少数者が演じている役割に似たことを少数者の封建領主が行っていた」と言っている。

14) Ibid., 117; 同上訳書、347

15) Ibid., 117; 同上訳書、346 :Raley, Harold C.:op. cit., 80ss

*オルテガは、「一国の力が統一だけにあると考える人は、封建制度を有害だと考えるだろう。しかし、統一が絶対的に良いのは既存の諸大勢力を結合するときのみである。統一された諸要素の中に活力が欠けていたがゆえに達成できた、生命のない統一もある。」と指摘している。

16) Ibid., 117-119; 同上訳書、347-349

17) Ibid., 119; 同上訳書、349

18) Ibid., 119-120; 同上訳書、350

*オルテガは「統一はたとえそれを操る者がきわめて軟弱でも、それだけで大事業を可能にする驚くべき仕掛けである」と言っている。

*またスペインにおける「国民国家」成立については「スペインとフランスにおいて、国民という『感情』が固まってきたのは十七世紀の前半だったことは既に見たとおりです。しかし、それが存在していたのは、十六世紀の三十年代以来であることがわかっています。イギリスは少なくとも一世紀先行していました。イタリアとドイツは、それぞれ異なった理由からですが、もっと遅れています。〔ヨーロッパ〕大陸ではスペインが先頭をきっています。スペインは、大陸の大国の中で、統一的な国民国家を形成するに至った最初の国であります」。「同じ頃、スペインでは、はからずもカタルーニアの分

立主義が台頭しています。……………

一五五〇年以来、スペインが他の国々に与えていた印象が、このために影をひそめるはずはありません。……………たしかに、スペインという国は、あの歴史的な人間群 fauna には、大きな国でした。それが突然、一塊りの、すごく密集した歴史的な姿へと変貌したのです。すなわち、国家（ナシオン）としてのあらゆる特性を備えたわけです。そして、それに続いたのがフランスでした」と言っている。(Ortega y Gasset, J.: Meditación de Europa (1960), Obras Completas, Tomo IX, 288, 289, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 吉田 秀太郎訳、ヨーロッパ論、209、210 白水社、1970)

19) Ibid., 120; 同上訳書、350-351

20) Ibid., 120-121; 同上訳書、351-352

21) Ibid., 67; 同上訳書、279-280

22) Ibid., 67-68; 同上訳書、280

*オルテガは次のように指摘している。「独立主義者の理論や地方主義の政治綱要やその関係者たちの発言は興味を欠いたものであり、大部分は作りごと」であって、「集団精神の底で作用している捕えがたくてあいまいな深い感情を、ほとんどいつも不適切に表現した紋切型の表現として単に象徴的な価値を持つだけにすぎない」。「政治や歴史の場合、噂で動くと思わしい誤りを犯すことになる」。
*さらに、「人びとが考えたり述べていること—世論—はつねに尊敬に値するものだが、彼らのほんとうの感情を正確に表現していることはまずない。病人の訴える苦痛が、そのまま病名に繋がるわけではない。心臓病の患者は、心臓を除いた身体全体の苦痛を訴えるのが普通である。また頭痛がするとき、実際に治療を要す

るのが肝臓だということもある。医学と政治は、それが進んだものであればあるほど、ますます実際的な方法に近づく」(Ibid., 68; 同上訳書, 281) と言っている。

23) Ibid., 68-69; 同上訳書, 281-282

* オルテガは次のようにも言う。「人に判断を下すよりもその人の理解により多くの関心のあられる方には、右の感情はいかに不当なものと考えられようとも誠のものであることに気づくことがずっと重要である。愛していない女と暮らせとの判決を下された男は、この女の愛情に苛立ちを覚える鎖のすれ音を感じる」。

24) Ibid., 69; 同上訳書, 282-283

25) Ibid., 69; 同上訳書, 283:op. cit., 259-260, 269-270; 前掲訳書、大衆の反逆、223-224, 239

* オルテガはスペインの近代国家形成の「可変的原理と統一的原理」について次のように述べている。「つまり、ある時代において国民性の基礎になっているかと思われたものが、後の時代には否定されていることである。最初は、国民すなわち部族であり、隣の部族は非・国民である。その後、国民は二つの部族から構成され、さらに後になると一地方の全住民となり、間もなく伯爵領、公爵領、『王国』となっている。たとえば、まずレオン（十世紀に生まれたスペインで最初の王国。一二三〇年カスティーリャに合併された）は国民であったが、カスティーリャ（十世紀に生まれた王国でスペイン統一に中心的な役をはたした）は非・国民であった。次にはレオンとカスティーリャは国民となったが、アラゴン（十一世紀に生まれた王国で、十五世紀にカスティーリャと融合した）はまだ国民ではなかった。ここに二つの原理が存在して

いるのは明らかである。一つは可変内でつねに超克されていくもの—それぞれの言語もしくは方言を持った種族、地方、伯爵領、『王国』—であり、もう一つは永続的なもので、そうしたすべての限界を自由にとび越え、前記の原理がまさに自分の対立物と考えていたものの統一を要求する原理である」。

26) Ibid., 70; 同上訳書, 283-284

27) Ibid., 70-71; 同上訳書, 284-285

* 「カルロス三世の場合」においてもオルテガは、「彼の政治の一部は普遍的人間文化の観点からは共感を抱けるものであろうが、たぶん全体となると、君主政治の歴史が示しているよりずっと分立主義的、反スペイン的である」と言っている。

28) Ibid., 71; 同上訳書, 285-286

* ルナンによれば、「国家とは日々の人民投票である」。すなわち、「人びとの心の奥底では、国家がこれからもほんとうに国家であり続けられようかどうかを決する投票が日ごと行なわれているのだ」とオルテガは言っている。

29) Ibid., 71; 同上訳書, 286

30) Ibid., 74-75; 同上訳書, 290-291

* 一つの社会が分立主義に陥らないために必要なこととしてオルテガは、以下のように言っている。「一つの社会を構成している各部分が、その欲求や思想の点で一致することは必要でもないし、また重要なことでもない。必要にしてかつ重要なことは、各部分が他の部分の欲求や思想を知り、何らかの形でそれを自ら体験してみることである」。

* さらにオルテガは国家における連帯感の意識による「社会的弾力性」について次のように言っている。「国家の形成は、その成員全体に最高度の恭順、つまり服

従と相互依存を要求し、人びとをそれへと駆り立てる強力な事業を中心になされる。人が難局や危機に遭遇したとき、彼に現われる最初の反応は組織全体が緊張すること、すなわち生命力の隊列を結束せしめ、危険な状況に対して警戒し、敏速な攻撃の用意を整えることである。「こうした性質は戦争の場合に最高度に現われるが、健康な国家ならすべてがかなりの程度にそなえているもので、私はこの性質を『社会的弾力性』と呼んでいる」。「このような弾力性を持った国家だけが、好機が巡って来たとき即座に歴史的な電気に満たされ、その力によって利をもたらす、決定的な反応を起こすことができるのである」。(Ibid., 73-74; 同上訳書、288-290)

31) Ibid., 79; 同上訳書、296

* オルテガは分立主義者の政治家への態度について次のように分析している。こうした「分立主義に陥った階級は、自分の欲望を果たすのに、他者を考慮しなければならぬ施設や機関に訴える必要があると思うと、自分が辱しめを受けたと感じる」。「分立主義者にとって、他者とは」、「何でもないということである」。「わがスペインの軍人や貴族や産業人や労働者がおのおのの請願や要求を議会に願い出なければならないとき、それぞれが感じる例の深い嫌悪感、屈辱感はこの由来し」、「通常、この嫌悪感政治家に対する軽蔑感の仮面をかぶっている」。オルテガによれば、「他の集団が政治家集団に嫌悪を抱く最も決定的な理由は、政治家集団が、すべての階級は他の階級に依存しなければならないという必要性を象徴している」からなのである。

* オルテガは「スペイン経済の破局」状況

についても、「政治家の無能、無頓着ぶりがいかに大きいとしても、銀行家や実業家や生産者ほどひどくない」と批判し、それは「わが国の産業人、財界人の愚昧と墮落によってもたらされた」と非難している。(Ibid., 79-80; 同上訳書、297、298)

32) Ibid., 76; 同上訳書、292-293

33) Ibid., 77-78; 同上訳書、294-295

* モロッコ事件についてはオルテガは「そのときに集団としての意識は再び完全なものとなり、軍隊は内部の結束を固め、自己を取り戻した。しかしこのことによって他の社会階級との連帯を取り戻したのではない。まったく逆なのだ。このときに集団の統一をとり戻したのは、前述の他の階級や職業に向けての険悪な対立感情を中心に生まれたのだ。とにかくモロッコ事件は、ばらばらであったわが軍隊の心を引き締め、精神的には攻撃態勢をとらせたのだ」と言っている。

34) Ibid., 78; 同上訳書、295

35) Ibid., 81; 同上訳書、298-299

* したがって、労働者にとっては、「間接行動、つまり議会主義は、横領者、すなわち社会的存在として正当性を持たない者と契約を結ぶに等しい」のである。しかも、「労働者の分立主義は一つの理論から出ており」、「幾何学、ダーウィニズムのように理論的、合理的なので、統一の強さがどうであろうとあらゆる民族の中に存在」し、「労働者の分立主義はスペイン独自の現象ではない」。それに反し、「産業人、軍人、貴族、被使用人の分立主義はスペイン独特のもの」である。こうした分立主義は「今日スペインのほとんどすべての階級精神の地下に働いている意識状態」であるとオルテガは指摘

している。

36) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 190-191; 前掲訳書、大衆の反逆、123-124

37) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 81, 82; 前掲訳書、無脊椎のスペイン、300

38) Ibid., 82-83; 同上訳書、300-301

39) Ibid., 302-303; 同上訳書、302-303

* マウラについてはオルテガは、「マウラのすぐれた精神は、数年間政界を離れている間に、偉大な事業をなすときは排他的戦法は最低のものであることを理解した」と指摘している。そして「ある種の排斥を完璧に行なうには、その代償として、寛大な協力の呼びかけ、つまり、すべての者が自分に向けられたと感じるような呼びかけを四方八方に向けてする必要がある。成功裏に終わった革命や変革は、広い度量の理念の下になされてきたが、一方労働者の革命は排除により勝利を得ようとするばかりの企てのために失敗している」と言っている。

40) Ibid., 84-85; 同上訳書、304

* 雑誌《スペイン》一号。

* オルテガは「今日の不統一状態」が生み出した「われわれの社会生活のたいへん特徴的な現象」として、「誰でもが一軍人、労働者、この政治家、あの政治家、この新聞グループ、あの新聞グループ—壊す力は持っている」が、「誰一人として作る力、自分自身の権利を守る力すら持っていない」ことを挙げている。

41) Ibid., 85; 同上訳書、305

42) Ibid., 121; 同上訳書、352-353

* オルテガは「私が一つの欠如に、したがってただの否定であるものに積極的行動力を与えるのを不思議に思わないでいただきたい。まったく正しいのだが、ニーチェは、われわれの生には単にわれわれに起

こった事柄だけでなく、またたぶんそれ以上に、われわれに起こらなかった事柄が影響すると主張した」と言う。

43) Ibid., 121-122; 同上訳書、353-354

* オルテガはここで「いつまでも発展の第一段階である村の状態に留まっている民族」について述べている。「村では隣人はたくさんいるであろうが、その精神はいつまでも百姓のものであろう。何世紀もが、この村を煩わすことも揺り動かすこともなく通り過ぎるだろう。播種と刈入れ、これに類した仕事のうちにこの村はつねに同じ周期を繰り返しながら永遠に生きるだろう」と指摘している。

44) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 242-243; 前掲訳書、大衆の反逆、197

45) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 122; 前掲訳書、無脊椎のスペイン、354

46) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 242; 前掲訳書、大衆の反逆、註196

47) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 123; 前掲訳書、無脊椎のスペイン、355

48) Ibid., 123; 同上訳書、355-356

* オルテガは「印象の明晰性と思考の明晰性」、「ラテン的明澄性とゲルマン的明澄性」について次のように語っている。「たしかに、表面が明澄であるという、一つの独自のあり方と、深層が明澄であるという、もう一つの独自のあり方が存在する。印象の明晰性と思考の明晰性が存在するのだ」。「スペイン人の地中海的な容貌のかけには、アジア的、あるいはアフリカ的な表情がかくれているようにおもわれる」。「荒々しくとげとげしい情熱をもって私の内部に住んでいるイベリア人をけしかけて、私の魂の薄暮地帯で呼吸している、思索的で情感的な金髪のゲルマン人たちに敵対させることをし

ないでほしい。私は私の内部にいる人たちに仲間おりをさせたいと切望する。それゆえ私は、彼らを協力の方向へ推し進めるのである」。 (Ortega y Gasset, J.: *Meditaciones del <<Quijote>>* (1914) , *Obras Completas*, Tomo I , 356, 356-357, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 長南実訳、ドン・キホーテをめぐる省察、96、97-98、白水社、1970)